

維新以後の北九州地方における衣生活

和洋女大文家政 鷹司 綸子

目的 欧米文化流入後の衣生活の変貌を、日本列島の北から明らかにしてきた。それは農耕と云う安定を好む文化形態が、急速な日本の近代化にどのように対応したか。又、藩と云う地域社会の中で、特色・個性をきかきあけていた人々が、突然支えられた画一的な制度や南化の風を、いかに消化し融合させてきたかを、第2次世界大戦後の更に大きな変貌への橋渡しの時期として明らかにしようとしたものである。本年は、北九州地方をとりあげた。

方法 本学研究室施行の明治生活調査、地方誌、县市町村史等を資料に検討を加えた。

結果 この地域は古代以来、日本の外交拠点としての長い歴史をもち、特に江戸時代にあつては西欧との唯一の接点として特別な立場にあつたために、制約も他よりきびしくなく、やや内とりをもつた衣生活があつたことは先年明らかにした。ところが、高島秋帆や維新・新政府の要人を送り出した地域でありながら、特に宣教師ド・ロー師によるフランス風の服を一部地域で早くに受け入れると云つた人もあるものの、全体としては、むしろ生活の変化はゆるやかであつた。これは普通いわれる「新しいものが珍らしくない」とも云ふことながら、例えは維新で、長襦袢を受け入れず短かいものを着た(長袴)と云つた袴袴と共に、文化の伝播が東京・横浜型に変わったことからくる現象と考えられるのである。